「底が突き抜けた」時代の歩き方580

戦場からの手紙－国家の言葉につきうごかされていった兵士たち

戦時動員で駆りだされた職業軍人ではない兵士たちは、戦場での死にたえず直面させられるなかで、自分の想いを託す言葉をもたなかった。人間というものが自分の言葉をもたないまま、死んでいくことに耐えられる存在であるのかどうかは知らない。また、巨大な死の歯車の中で翻弄されながら、声一つあげず虫のように絶命していくことを甘受する存在であるのかどうかも知らない。しかしながら、兵士が故郷に向けて自分が無事であり、いまどこにいるかを知らせようとする軍事郵便のなんの変哲もない言葉の中にも、自分たちに書き綴る故郷や家族があることの幸せがあふれ返っていた。たとえば、「拝啓御無沙汰しましたが／僕もますます　元気です」という文言には、元気で還る日まで自分を待っていてくれ、という思いが行間に滲みでていた。単なる「元気」ではなく、死をも覚悟しなければならない戦場の中での「元気」であった。

万感(ばんかん)あふれる「元気」という言葉であるにはちがいなかったが、その「万感」は「元気」の一言に収められるほどには小さくもなく、手軽でもありえなかった。どうして「万感」の思いはそれにふさわしい言葉をもたずに、「元気」という慣用語に盛られようとするのか。その理由は「万感」を「万感」として伝えようとする言葉を、兵士たちはもたなかったからだという以外にない。「元気」という慣用語はそれでも、戦闘行為に参加しながらも負傷せずに過ごしているとか、生きているとかの安否を精一杯伝えようとしていた。心配している家族からすれば、肉声として聞こえてくるかのような「元気」の慣用語が届けられるだけで十分であったかもしれない。軍事郵便で家族に「元気」を伝えること以上のなにを伝えることがあるだろう。それで十分ではないか、と言われればそうだろうとしても、「元気」の慣用語が、最小限度の伝達であることも明白であった。

郵便は家族宛でありながら、自分宛の郵便であったことも看過してはならない。家族宛の「元気」は自分自身にはなんの意味もなかった。慣用語以上の言葉ではなかった。家族や仕事からいきなり切り離されて、心の準備のないままに戦場に送りこまれてしまった困惑や不安な気持が、「元気」の慣用語の中に盛りこまれる筈がなかった。したがって、家族を安心させるために書き綴る「元気」の慣用語の中で、兵士自身は自分を納得させる言葉を見出せずに打ちふるえていたといえよう。だがそんな困惑や不安も、軍隊生活のなかでしだいに掻き消されていったにちがいない。自分が戦場にいることを何度も言い聞かせながら、早く馴れなければ苦しい思いが募ってくるばかりであったからだ。自分の想いを託すことのできる言葉ではけっしてなくとも、家族に届ける「元気」

の慣用語を頻繁に使ううちに兵士自身もその言葉に馴れ、軍隊生活にも馴れていった。

その馴れのなかで、戦場にいる自分を納得させる言葉を自分がもっていないということにも馴れ、そのことになんのしこりも感じなくなることにも馴れていった。家族宛の「元気」という慣用語は、兵士自身の存在をその中に包みこむようになり、「元気」の慣用語は軍隊生活が比重を増すにつれて、国家が繰りだす「東洋永遠の平和」や「東亜建設」の慣用語にたやすく取って代わられていったのである。「元気」がたえず脅かされているから「元気」が強調され、戦争によって「平和」が損なわれているから「平和」が謳われ、戦争による破壊が広まっているから「建設」が連呼される逆説的な隠蔽の中に、兵士たちは軽々と吊り上げられていったのだ。戦場から家族や故郷に送られる軍事通信のなかに、自分の言葉をもたない兵士たちがますます言葉を奪われて、国家の言葉に同化していく有様が刻々と浮き彫りにされている。

鹿野政直『兵士であること』所収の「村の兵士たちの中国戦線」には、恩師である銃後の高橋峯次郎宛の軍事通信７０００通（実際は８千通を越えると推定されている）のうちの数十通が取り上げられて、戦時中の兵士たちが戦地でなにを考えながら、どのように過ごしていたか、などについて考察している。膨大な数の書簡群が積み重ねられていったのは、≪高橋はみずから編集・発行する『眞友』を、欠かさず彼らに送付しており、兵士たちの通信はそれへの礼状というかたちをとることが少なくなかった≫からだ、とみなされる。ここでは比較的よく名前が見出される若き農民兵士、加藤孝志の軍事郵便を中心に、自分の言葉をもたなかった兵士が国家の言葉の中で、どのように変わっていったかを辿ってみる。

「内地は今は田植盛りでしやうね。朝鮮も始りました。田植を見ると、内地の方は思ひ出れて来ます」（一九三七年六月六日付、朝鮮派遣時代）

「内地の方は今は田植も終り、今は一番除草も半分位を終つて居るとの事で有りますね。遠い朝鮮でも今は一番除草盛んで有ります。演習や外出を致しまして営外に出ると、鮮人は小唄を歌いながら田の草取を見ますれば、内地の事が思ひ出されて来ます」（一九三七年七月十五日付、朝鮮派遣時代）

「暇は有れば眞友を出して見て内地の方を思ひ出して居ります。やつぱり夜のお月様は、内地に居ると変りません。東より出て西に入る」（一九三九年七月）

「農作物の方からお知らせ致します。私し達の警備して居る場所、内地と別に変り無く水田も有りますれば、畑も有ります。水田の稲などは穂は全部出揃ひました。話を聞けば、一ヶ年二回取れると言ふて居ります。第二回目、苗なども二寸位になつて居ります。で有るから、どれだけ暑いかと言ふ事は、わかると（思ひ）ます。畑は大根は見ませんね」（一九三九年七月、日不明、「中支」派遣時代）

「内地の方は、稲刈は初まつた事と思ひます（中略）。中支は第三回目の稲刈も終りました。三回目の稲は二回目の稲の刈取つた後に出来た根で有ります。穂は小さいけれ共も、年に三回も稲は取れるとは、初（ママ）驚きました」（年不明〔一九三九年カ〕十月二十四

日付、「中支〕派遣時代）
≪戦地での同じ村の出身者との邂逅は歓喜であった。通信にはそのことを特筆大書するという気分で伝える場合が少なくなく、『眞友』には彼らの消息を知らせてほしいとの戦地からの通信が、しばしば摘録されている。『眞友』を考慮外に置くとしても、兵士たちには、「大陸では同県人と聞いたら、親兄弟と逢ふ様な気持」を誘発したのである（一九四二年月日不明）≫
「内地の方は田植も半分以上も終つたろうね。朝鮮地方は今は盛んだ。演習に営外に出て農村を見ると、内地の事を思ひ出して呉るよ。
自分の家では働手は無い為（ため）に村の青年団少年団までは手伝に来て呉れると母からの便りは来る。俺は涙を流（ママ）らて、遠い兵舎の窓より故郷の方を拝して居（いる）、許して呉れ。これも皆先生の指導と思ひ、私ども安神して家の事は心配せんで勤めて居ります。」（一九三八年六月十三日付）
≪高橋喜一は、農作業を戦闘になぞらえて捉えた兵士であった。こんなふうに書き送る。「此の暑気は我村も又大陸の方も同様で御座います。大陸の戦士も又泥田の除草に努力さるゝ郷土も誠に御苦労様で御座います。尚この両戦士に威大なる御力を与へて下さる先生の御努力誠に感謝の外ありません」（一九三九年七月四日付）。こうも記す。「さて村も天下わけめの取入れ時にて御座います」（同年九月二十四日付）。さらにいう。「農家一大作戦期なる大農繁期と相成りました」（一九四二年月日不明）、また「愈々（いよいよ）農事戦線も激烈を極められて居る事にて御座ゐませう」（一九四二年月日不明）。兵営や戦場に身を置きつつ、そのゆえに出てくる発想であった。それだけに高橋は、農事がつい脳裏から遠ざかっているのに気づくと、狼狽せずにはいられなかった。「さて先生、村は今は稲刈りで大多忙でせう。軍隊に居れば稲刈の事も忘れてゐて全く農村の皆様に恥入る次第です」（一九三八年十月七日付）。
　農事へのこうした関心はいわゆる郷愁にのみよるものではなかった。それまでの生活の場から引き離され、軍隊と戦地という二つの意味での異境で、生まれ育ち生計を立ててきた地が「故郷」と意識されたことに由来するその地への慕わしさは、もとより深かったに違いないが、郷愁のみにとどまってはいられない切実な事情が、一人ひとりを捉えていた。いうまでもなく、「中堅」となる働き手を送りだし＝奪われ＝失って、田畑をどのように維持してゆけるか、暮らしをどのように立ててゆけるかへの懸念であった。「こちらの農作物は刈取るものもなくよい稔を見せて居ます。うちの方はどうですか。多数の有力な中堅層を送つた地方は多忙を極めて居るでせう」との文言に（一九三七年九月二十八日付、高橋忠光書簡）、懸念の一端は示されている。農かな稔りが戦火によって放置されたままになっているのを見るにつけても、連想はすぐ、はたして故郷はどうかという方向に働くのであった。≫
≪後顧の憂いがどんなに深かったことか。したがってそれを緩和する援助は、なんと兵士たちを発奮させたことか。右に引用した三つの例はいずれも、援助への感謝と、みず

からの軍務への精励が対として表明されるという構成をもっている。当事者双方にあっては打算からもっとも遠い〝無私〟の心情が、御恩と奉公の関係を育成した。「おかげさま」は半ば以上慣用的な挨拶語の一つとはいえ、それに類する言葉を幾つも散りばめた次の書簡は、御恩と奉公の意識が社交辞令の域を超えて兵士たちを捉えていたことを伝えずにはいない。≫

「十二月三日、並、十二月二十五日、廿七日と眞友並に新聞等を有難く受領仕りました。御蔭様で故国の模様等を知り面白く又驚きました。厚く御礼申上ます。

私儀も、十二月四日早朝出発の為め御返信差上可きの処、不便なる地を敵の追撃中にて、遂い今迄御返信差上げ申さず、実に御申訳ありませんでした。私も御蔭様で百里以上の追撃戦斗数回に参加致しましたが、皆々様の御後援と御祈願の賜で無事御奉公申上げました。御安心下さい。

今は順徳に戻り警備の任に付きました。今後も一層の注意を以て任務を尽し得る覚悟でありますから、何卒今後共御援助下さる様御願ひ申上ます。留守中は生家の方にも種々御厚情を賜り此れ又有難く御礼申上ます。」（傍点は引用者ー鹿野、一九三八年カ十二月二十八日付、石川庄七書簡）

≪報恩の鞏固な意識は、兵士たちを郷里への面目に張りつけた。戦闘に参加できなかったことを郷里からの期待への裏切りと捉え詫びるのは、彼等に共通する心情であった。

「兼ねて待望し居りました熱河討伐には残念乍ら加はることは出来ませんでした。実に面目も有りません。郷土の皆様に対し申訳有りません。然し軍の必要上又上旨の命令で有りますれば如何ともなりません」（一九三三年二月二日付、藤根村在郷軍人会長宛千葉徳右衛門書簡。「満州」事変の最終段階で関東軍は、中国熱河省に作戦行動を展開した）。くどいほど幾重にも詫びの言葉を連ねずにはいられないほどに、郷里からの心の負荷は重かった。そっくり同様の心境は、加藤孝志の「軍隊も〇〇〇名出て〇〇〇方面に出動して居る。私しは永興湾要塞に警備に出て居る内に命令降下した為に、俺は残念ながら残留になつてしまつた。俺は村の人達に顔立ては出来ぬ。許して下さい。残念で〳〵有ります」にも見てとることができる（年月日不明書簡、このときは朝鮮での〝警備〟）。

しかも加藤の場合、郷里に面目を失ったとの意識に深く嗔まれ、みずからの責任でないことへの弁解ともつかぬ無念さ・情なさの吐露を延々とつづけるのである。「私しは六月二十七日より九月三日迄要塞に居りました。その内に出たらしい。出たのは、しらなかった。なにも通報も命令もなかったからね」、「それに咸興中心に大永害が有て、鉄道不通は四五日有りましたからね。今迄行つて居つた所は、咸興より百里も以上も遠く離れて居つからね。又今度二回の出動の時は、俺も働いて来るからね。持つて居て呉れ」、「俺は、手紙を書く元気もなくなつた。なんと云ふて書いて良いかわからぬ。第一線にでも出て居つたなら鼻を高くして出すけれ共も、第二線勤務と思ふと涙は出て来る。残念だ〳〵」、「村民になんと云ふて良いか、わからない。ただ元気で時節の来る日を持つて居る。来たなら人様には負けぬよ」、「私しは先生にも面目はない。入営して入院して

は心配を掛け、なんと云ふてお礼をして良いね。許して呉れ」。掻きくどくようなこの長文の手紙は、宛先人としての「先生」にたいして、「子供」との自称で結ばれる。

あえて「野心」という言葉を使うと、千葉にしても加藤にしても、野心的な功名心を先行させていたわけではない。彼らを捉えて離さなかったのは、郷土に向っての責務感恥辱感をともなっての面目意識であった。そのことが、ぶざまさへの、過度にというべき鋭敏な心を培った。当時、国策としてまた思想界で喧伝されていた武士道精神は影もさしていない。また大和魂もみられない。そうではなく、農民としての鞏固な郷土意識、村びととしての共同性にもとづく負担感が、兵士たちの〝遅れをとらぬ〟精神、〝後ろをみせぬ〟戦闘意欲を支えたのである。≫

「いつのまにやら雪の国にも春は、やつて来ました。若草、若芽、若き男女も、ほつ〳〵踊り出して来た。軍隊では此の気分の良き時節を利用して一生懸命に人殺の練習ばかりやつて居ります。時に今度、私し達は〇〇方面に行く事になりました。出発はまだはつきりして居りませんけれ共近い内にとの事で有ります。行く様になつたなら又、知らす。銃後は良くお願ひ致します。では、ごきげ（ん）よ、御身大切に　サヨウナラ」（年月日不明）

「待つに待つたる晴の出征もやつて来た。私しは元気で行つて来ます。銃後の事は宜しお願ひ致します。〇月〇日敵前上陸だ。死は覚悟の上だ。又後で知らす。
では行つて来ます」（年月日不明）

「陳者小兵先般任地派遣を命せられ本日無事到着仕り候間乍他事御休心被下度候今茲に母國遠く大陸に立ちて其の任や重く其の責の大なるを痛感致し居り切に胸を打つものは皆々様の熱誠溢れる御後援と御鞭撻に有之唯々感激の他無く厚く御禮申上候此の上は粉骨齋碎身以て盡忠報國の誠を致し皇軍の使命を完ふし誓つて皆々様の御期待に添ひ度き覺悟に御座候へば何卒今後共に萬事宜敷御願ひ申上候

先は乍略儀任地到着の御挨拶を申上げ遙かに皆々様の御健康と御多幸を祈り上候

昭和十四年四月二十九日

中支派遣軍　甘粕部隊佐藤部隊小野隊　　加　藤　孝　志　」

右の葉書は≪征地に着いての挨拶状をなす。定まり文句の典型というべき通信で、印刷された文面が兵士一人ひとりに渡され、年月日、所属と氏名のみ書きこめばいい形式である。ひょっとすると、ときの天長節を期して出すようにとの通達があったかもと思わせる。ここでは加藤は、規格品としての兵士の位置に捉えられていた。≫

「此れからは冷（すず）しくなつて来るばかりだから、毎日〳〵討伐は続くと思つて居ります。私し達は討伐は目的では無いけれ共も、悪ひ者は出て来ると見ずには居られぬからね。近頃、二月に一回位、軍の大討伐は有ります。八月五日出発の〇〇大討伐に私しも出ました。俺は一小隊の二分隊長として出ました。八月の最後の二十九日、隊の命を受け、部下部隊を以つて、斥候に出ました。出発したのは午後十時頃と思ひます。明午前二時頃になつた処、敵弾は雨の様にパラ〳〵やつて来たので、姿を、小さくせい〳〵と、言

ふて居る内に、群馬県出身の兵隊、一人、重傷を負つたのですぐ手アテをしてやつたけれ共も、三十分後には死んでしまつた。死んだ兵も中々働いて呉れたつた。まだ殺したくなかつた。死ぬ時は、一番先、お母さんと言ふた。次は、ばんざいとさけんで、此の世を出た。残念ながら分隊の兵一人小なくなつた。敵情は、〇〇高地に、固い陣地は有り兵力は幾百人有るやら、わからぬ相様だつた。良く敵情は見聞し、戦死せり兵は戦友の背に部隊に帰つた。時、三時頃と思ひます。一番弾の飛んで来た時は、二時頃より三時半まで有つた。俺は、二時二十分頃を頭を少し負傷した。ほんのかすり傷だつたから、大した事も有りません。」（傍線は原文、一九三九年九月日不明）

「僕は一番の楽しみは討伐だね。足は丈夫に出来て居るから、歩く事は人には負ける事は無い。僕は第三分隊長として出たよ。内地を出るときは、分隊長では無つたがね。今は分隊長だ。内地出発の時の分隊長は、下士官で有つた。その下士官は部隊本部付になつたので今は私しは分隊長として服務して居る。

兵の悪い事は皆、分隊長に来る。俺の頭では兵を自由に仕ふ事は苦しかつたけれ共も、今は大分、良くなつた。普通の上等兵とは別で、仕事は大いので、便を出す事さへ出来ぬ相様だ。

分哨は出なければならぬしね。でも分哨長として行くから別に骨の折れる事も無いけれ共、敵は出て来ると、又心配な事も有る。

七月、二十九日上番、〇〇分哨、司令として服務した時などは、巡察に出て、敵の、スパイを、生取りにして来た。今は憲兵隊の方に送つたけれ共もね。

敵は皆、良民の様にして来て居るので中々、見出し事は出来ぬ。土匪には一番、こまるね。それに負残兵にね。どこで（も脱ヵ）良い日本の兵隊が一人二人で歩いたら射撃をする。」（一九三九年八月二十九日付）

≪「殺す」という行為が、兵士のなかでいかに自己目的化していったかの例は、神奈川県中郡相川村の農家生まれの工兵岩崎昌治の場合にみることができる。彼は、一九三七年（昭和十二）九月二日に応召、中国戦線へ送られ、翌三八年六月十日に戦死するまで、筆まめに家族や親族に通信で心境や状況を伝えつづけた≫と記されており、以下は岩崎の軍事郵便を追っていくことにする。

≪上海に上陸し、その周辺地域へ道路補修などに派遣された岩崎のみたものは、戦争のあとの惨たらしさであった。「家を焼かれ、土地を追れた彼等土民のあはれさは如何戦争がーいや敗戦の民のかなしさ、戦に人情は不要とは言ひ乍ら他人事とは思へない」（一九三七年十月二十二日付）、「支那は丁度大正十二年九月一日の東京市と思へば間違い無いでせう。彼等が日本をうらむのは無理ないでせう」（同日付）。後者の場合を除いて、破壊をもたらした者が誰かへの省察＝当事者意識の自覚が乏しく（それは「戦況」として捉えられている）、また、住民を「土民のあはれさ」とする視線の所産であるとともに、眼前の悲惨と対比的に「日本人と生まれた事は幸福」に収斂する感想であったが、それでもそこには、彼らを生活する人びととする認識があった。それだからこそ彼は、

現役兵として入営する弟忠治を、「出来る事なら北（「此」の誤植か）の事変に参加させ度い。そして支那と言ふ『土地』に一つは興味を与へ如何に広く、如何に豊かゝを知らせ度い」とも書き送ったりした。

だが参加した南京攻撃戦は岩崎を変えた。「南京の下関駅（支那語でゲカンシャキョウ）を工兵隊が占領したのが十四日未明です。時に敗残兵約八百名位我等工兵の手で揚子江の川べりで銃殺しました。人を殺して居るのか、竹でも河に流す気か自分でもわからないほどでした」、「今日は南京の入城式です（中略）。其の為に昨夜城内に居った支那人を約二千名ばかり集めて本日の未明全部殺してしまったのです。揚子江の河べりだけでも約五千名位の死体がごろごろして居ります。海にいる魚で『イルカ』と言ふのが死体を食ひにどんどん上って来ます」（一九三七年十二月十七日付）。

この日の午前中、岩崎は巡察にでて、午後は休養となっていた。その休養時間中に彼はこの手紙を書いている（と書簡中にみえる）。揚子江の光景は巡察中にでも見たのであろう。でもそれは、強く突き刺さる異常としてよりは、もはや平常のなかに埋めこまれた光景の一つとなっていた。それゆえに彼は、一呼吸おくつもりか改行して、こう続ける。「のんびりとした気分です。下関駅の表窓により外を眺めて久しぶりに内地の人の事を思い出して居ります」。

そうした「のんびりとした気分」を現実に立ち帰らせるのは、岩崎の表現を借りれば「ドーンドーン」という「まだ殺し切れぬ敗残兵を殺して居る者」や、「時々風の吹き廻してやって来」る「死体を焼いて居る一種別な悪い臭ひ」であった。そのことが彼を、殺戮という行為についての理由づけを迫る。「幾度も手紙に書いたが一人も残しては居く事が出来ないのです。何故なら彼等が一名でも生きて居たらどうなります。日本軍も戦地では観兵式で見る様な兵隊様ではなくなります。相当に自分の部下を、戦友を殺し傷つけて居る為（ため）、気でも狂って居る様です。支那人さえ見れば、『やっつけろ』で、すぐに永の旅です」。こう書いてきて彼は、みずからも加わった殺戮への疑念を何としてでも払拭せねばとの気持に襲われたのであろう、「皇軍」「日本」という〝大義〟をもちだすばかりでなく、国民にも同意を求めるに至る。「彼等一名でも生きて味方の陣地に帰ったら　さもなくも宣伝上手な支那人です。どうなるか。皇軍の為　日本の為に彼等を血祭りに上げて居るのです。この気持は私一人ではない。分隊全員〔全員十六名中二名死　五名負傷〕いや中隊全員が此の気持です。内地に居らるゝ人も此の気持、苦しい気持良民と判って居ても殺さなくてはならない気持は良くわかってもらへるでせう」。

そこでは、上陸当初は幾らかはみられた生活者としての中国人との観念は消えうせ、中国人＝敵＝抹殺すべき存在との意識が、それに取って代っている。と同時に、破壊を「戦況」と捉え、その意味では当事者性の稀薄だった姿勢は（それはもともとは、みずからを破壊の当事者＝主体とする意識の稀薄だったことにほかならないのだが）、積極的に殺戮の当事者であることをためらわない姿勢へと踏みこんだ。それでいて、手柄をたてたとか凱歌をあげたとかからは遠い、重苦しい気分が彼を包んでいったことが読み

とれる。事態の正当化には「皇軍」「日本」を掲げるほかなく、そのことがいっそうそれらの価値に縋(すが)りつく意識を強めてゆきもしたであろう。≫

戦争をするために中国にやって来ている日本の兵士が、中国の軍隊を敵とみなして交戦するのは当然のことである。しかし、岩崎の書簡によれば、敵は中国軍のみならず、非戦闘員である≪生活者としての中国人≫にまでひろがり、≪抹殺すべき存在≫として彼らが日本軍の眼前に迫り上っているのがみられる。戦闘が激しく猶予ならなくなってくれば、非戦闘員である中国人まで敵にまわさざるをえなくなってしまう、ということではない。味方と敵を厳然と区別する状況に放り込まれれば、人間はその状況のなかにあらわれてくるすべての存在を味方か敵かに峻別せざるをえなくなってしまうのだ。味方でも敵でもない≪生活者としての中国人との観念は消えうせ≫、すべてが味方でなければ敵であり、敵でなければ味方であるという二分類の機械的な思考に頽落していく。したがって、戦争では敵でも味方でもない膨大な領域が消失する事態を招来する。

味方があって敵が存在するのではない。敵とみなされたとき、味方が生みだされてくるのである。敵とみなされたとき、敵という存在が出現するにいたるのであって、初めから敵という存在がいるわけではない。敵でも味方でもない≪生活者としての中国人≫が日本軍にとって敵とみなされるようになったのは、日本軍が非戦闘員である中国人を敵とみなすようになったからである。日本軍から敵とみなされたとき、全中国人が日本軍の敵となったのだ。全中国人が敵とみなされるなら、「支那人さえ見れば、『やっつけろ』」になるのは一本道であり、殺戮を積極的に位置づけるために「皇軍の為　日本の為」という〝大義〟が身にまとわれる。そこに自分の言葉はけっしてない。自分の為に殺戮しなければならないから、自分の言葉を殺戮の理由づけにする、ということにはけっしてならない。自分も自分の言葉も「皇軍」「日本」の中に解消されて、自分は見失われてしまっているのだ。

誰もが自分の言葉をもっていたなら、けっして戦争にいたることはない。戦争は自分の言葉が深く見失われていく諸関係の総体において惹き起こされているからだ。戦争には言葉はいらないから、したがって、自分の言葉をもたない兵士が巨大な沈黙の中に応召され、吸いこまれていく仕組みになっている。戦争はただの殺戮ではなく、敵の殲滅にほかならないから、自分の敵ではない国家の敵を殲滅させるために、沈黙の自分は「皇軍」「日本」などの国家の言葉に溶解していく以外にない。別の言いかたをしてみる。戦争が国家のものであるなら、戦争は国家同士でやればよい。しかし、国家は国民において具現されているから、国家間の戦争は国民同士の戦争としてしかあらわれない。国家が国民の沈黙総体のなかに聳立しているなら、国家間の戦争が国民の沈黙総体のなかで行われ、兵士としての国民が国家の言葉のなかで手駒として行動するのは避けられない。というより、兵士にとっては自分の沈黙を国家の言葉として、敵を殺戮していく以外の役割はもちえない。

殺戮という≪事態の正当化には「皇軍」「日本」を掲げるほかなく、そのことがいっ

そうそれらの価値に縋(すが)りつく意識を強めてゆきもした≫という記述は、正確ではない。≪「皇軍」「日本」を掲げる≫なかで殺戮が行われていたのであって、殺戮を正当化するために「皇軍」「日本」が掲げられたのではないからだ。「皇軍」「日本」として兵士たちが振る舞ったとき、「皇軍」でもなければ「日本」でもない非戦闘員である中国人は当然、「皇軍」「日本」から弾き出されざるをえなかった。「皇軍」「日本」に同化しようとした中国人を除いては。弾き出された中国人の異和と反撥を兵士は敵意とみなして、彼らを殺戮するにいたったのだ。兵士が「皇軍」「日本」として中国で行動しなければ、非戦闘員の中国人の殺戮など起こりえなかったにちがいない。しかし、自分の言葉をもたない兵士は、国家の言葉である「皇軍」「日本」として行動しないわけにはいかなかった。「皇軍」「日本」でなければ、中国へやって来て戦争などする理由はなかったからだ。≪伯父昌治の陣中書簡を編んだ岩崎稔は、彼の書簡にみえる「『匪賊』と『敗残兵』に、残忍な虐殺」と、同じく「書簡のはしはしにある弟たちに対する優しさ。両親への思い」との共存に注意を引かれている。「戦争というものがなければ、どんなにか幸福だったろうか」というのが、肉親にたいする編者としての岩崎稔の感慨だが、思いやりも深かったであろう生活者を、同時に惨劇の遂行者としてしまうところに、戦闘のもつ心身への食い込みがあった≫と続けて記されているが、思考はここで停止してはならない。≪思いやりも深かったであろう生活者≫のその≪思いやり≫が、「皇軍」「日本」として行動するなかで遮られて、同じ生活者であった中国人に対しては敵意と憎悪を振り撒き、殺戮へと向かったことを問わなくてはならない。家族に対する思いやりと戦争での「残忍な虐殺」との共存で納得してはならなかったし、戦争はいかに普通の生活者を≪惨劇の遂行者としてしまう≫か、といったところで感傷に耽ってはならなかった。

思いやりと残虐さの共存ではなく、家族への思いやりが戦場では残虐さとして発揮されてしまう、というありかたこそが問われるべきではなかったか。もう少し言えば、家族への思いやりの閉塞性こそが戦場での残虐さの根源ではなかったか。数多くの軍事郵便にみられるように、大半の兵士が家族や故郷を背負って戦地に赴いたのである。家族や故郷のために戦うことと、皇軍、日本のために戦うことは全く同じであった。つまり、家族や故郷のために皇軍、日本として戦っていたのである。自分の家族に対する思いやりは、生活者としての中国人の家族への思いやりにはけっして結びつかなかったのだ。逆にいえば、中国人の家族への思いやりなどは踏みにじってもかまわないような思いやりにほかならなかった。戦争での殺戮は残酷な性格の兵士によってではなく、優しい性格の兵士によって惹き起こされていったことを忘れてはならない。

敵とみなされた中国人も黙って殺されているわけではなく、彼らの抵抗は強く、兵士たちを散々悩ませた。そんな戦地の苦労を知らずに、≪一九三七年（昭和十二）十二月の南京陥落で、国民が戦勝気分に浸っているの≫を、兵士の多くは苦々しく思っていた。≪岩崎昌治も同様であった。「とにかく南京占領でおめで度う」とはいいつつ、「戦勝で御祭さわぎをして居る時、不幸にも不帰の客となられた人の家族の人の気持ちはどんな

ものでせう」、「出征軍人が全部内地のさわぎを見て喜んだものが有るでせうか」≫。中国人の抵抗の強さは≪中国兵士と農民の結合にあ≫り、≪占領したはずの彼等は、たえず敵意に囲まれているとの不安≫を拭えず、頑強な「抗日」に対して≪討伐の対象とするか＝殺すか、宣撫の対象とするか＝手なずけるか≫が、大きな課題となった。

≪そういう状況下で討伐は、生命も家屋も破壊しつくす方向へと展開しがちであった。工兵であった岩崎昌治は、そんな事情を細かく書き送っている。「今居る所は支那でも一番下等な人種が居る所だ。百姓屋などに入るとこれが人間の住んで居た所かと思ふ様な所ばかりだ。それも大部分は焼いてしまってあるのだ。何故焼いてしまったかと言ふと土匪の群れがこれ等民家に土民に化けて入って居る。大勢の日本兵の姿を見ると日ノ丸の旗など持って良民らしく出迎える。十人・十五人の小隊で行くと、忽ち反日化してしまうのだ。だから、家と言ふ家は全部焼いてしまうのだ。まだ一つの訳がある。工兵隊の心血そそいだ架橋など一夜の中に焼いてしまう。油を使って焼くのでもない。付近にある『高リャン』のからか、もしくは家を壊したものだ。だから全部形の有るものは全部歩工の兵隊の為に焼かれてしまうのだ。一番可哀想なのは良民だ。良民でも土匪と共に居れば殺してしまう。だから、日本兵は恐しい。恐しいから日本兵の姿を見ると逃げる。逃げられると彼等は土匪だと言ふ事になる。すると、すぐに人差し指が引き金に当るのだ」。そのうえで彼は、「新政府（「中支」派遣軍の指導で成立した中華民国維新政府－引用者）が出来て以来、良民は良民、土匪は土匪と区別する様になる相だが、余り結果は思はしくないと思ふ」と見通しをのべている（一九三八年四月五日付書簡）。敵意に囲まれているとの不安が強かっただけ、兵士たちは凶暴になった。「此の間五十五才位の支那のおばあさんが私達の居る所を支那軍に教える為（ため）花火を上げる所を見つかえ（ママ）て（ママ）、とてもお話にならない殺し方をしてしまひました。女でも子供でも支那人さえ見ればもう彼等の命は、もらったり、勢い気持は荒々しくなってしまひます」（一九三八年三月二十五日付書簡）。≫

しかし、討伐より宣撫の記述が多かったらしく、≪「北支」の戦地に一九三八年（昭和十三）の新春を迎えようとしていた宮本満は、正義の戦であることを信じつつ、戦跡に避難民がぞくぞくと戻ってくるのを眺めて、こんな感想を洩らしている。「城内に治安維持会と云ふ者が組織され、一から十までと云ふ訳には行きませんが大体行きとどいてあります。城外は見るからに家はくずれ、みすぼらしい姿、食糧と云ふ物は全々（ママ）なく（ママ）、朝、人の起床しない内に老も若きも皆な城内まで来て、馬の朝餉又人の朝食を終る持（ママ）つて残飯をもらひ、そして一日〳〵の日を送り暮らしてゐる様（ママ）状態です。馬糧など、ちらばつてゐたらそれこそ鶏に餌をやつた時の様に我も〳〵と拾ひあつめます。／此れを見た私は人を殺すばかりが軍人ではない。ニーメンで（お前達）飯を下さいと言はれて、残飯をやつた時もあります。その子供はあとでカキを持つて来ました。全く私共の同胞です」（傍線は原文、傍点は引用者、一九三七年十二月二十八日付書簡）。≫

この善意について、≪（一）暮らしの破壊が日本軍の攻撃による点をまったく意識に

のぼらせていず、（二）占領者としての決定的な優越性を前提とする〝恩恵〟にほかならず、（三）「同胞」視を親愛感の基軸としていた≫と指摘し、≪日本化こそ正義の実現、正義の証しと自足することに、兵士たちはみずからの使命の意義を確かめていた≫と述べる。そして兵士の書簡群に目を通してきたこの文章を締めるにあたって、≪兵士の経験はやや拡散したかたちで国民の経験をなした。彼らの視野は国民の視野の凝縮体であった。以来半世紀をへて、いまわたくしたちはその視野をいかに超えているか≫と問いかける。

「兵士であること」は戦場における「国民であること」にほかならず、したがって、「兵士になること」は戦場の中で「国民になること」にほかならなかった。「兵士であること」は「兵士になること」によって、戦争の遂行が可能になってくる。しかし、国家の幅は戦時国家よりも大きいように、国民の幅は兵士よりも大きい。戦時における戦地では国民は兵士としての生きかたを唯一余儀なくされたが、戦時以外での国民は「国民であること」以外の大きな余地を占めながら生きていた。戦時国家が「国民であること」の領域を一気に膨らませることを国民に押し迫ってきたとき、その高圧にどう対抗しえるか、を問われていたのは、各人における国民ではない領域であった。戦時国家の要請に国民である自分は応えるとしても、国民ではない自分はどう応えるのか、という問題であった。戦時国家の高圧は国民に対して、国民である自分と国民ではない自分との調整を促迫したのである。

そこで浮上してくるのは、国民ではない自分はどのようにして生きてきたのか、という問題であった。それは、どのような自分の言葉のなかで生きてきたのか、という問題と重なっていた。自分は生活の言葉を、知識の言葉をどのように生きてきたのか。戦時国家が「皇軍」「日本」などの国家の言葉のなかで生きることを強制してきたとき、自分が生きてきた生活の言葉や知識の言葉や思想の言葉はどのように衝突するのか、が深く問われていたのだ。自分の言葉をつくりだすなかで生きようとしてきた者ほど、国家の言葉と衝突せざるをえなかった。ごく少数の知識人や思想者が国家の言葉に軽々と吊り上げられていくことを拒んだであろうが、国民の大半は自分の言葉をもたなかったことを露呈し、国民でない自分を縮小させながら国民である自分を突出させていった。戦時国家は当然の如く、国家の言葉のなかに全国民を掌握していったのだ。

国家は雄弁であり、自分の言葉をもたない兵士は沈黙していた。いや、自分の言葉をもたないだけでなく、国家の雄弁のなかで兵士は自分の言葉を死んでいた。兵士とは言葉の死者にほかならなかった。言葉の死者のなかでは人間はどんな振る舞いもできるし、国家の雄弁のなすがままであった。自分の言葉では引き受けることのできないどんな惨事も、国家の雄弁のなかではやってのけるし、日常的な事態ですらあった。自分の言葉をもたず、自分の言葉を深く死ぬことにおいて兵士になっていくということは、自分も相手も共に滅ぼす以外にはありえない点で、自分の人生の苛酷な敗北の姿を無惨にさらけだしている世界の哀しさなのだ。　　２００７年２月１１日記